

仮想接触がもたらす同性愛者への偏見や差別意識の変化への効果

梅 村 佳 奈

【問題・目的】 近年, 社会的にLGBTへの配慮が進んできているものの, 未だ十分に受容的な社会であるとはいえない。集団間関係の改善において, 偏見・差別意識の低減を目的とした仮想接触仮説が提起された(Crisp & Turner, 2007)。仮想接触仮説とは, 外集団の一員と良好な相互関係を築けている場面を想像することによって, 外集団への態度が好転するという説である。仮想接触を用いたゲイあるいはレズビアンに対する偏見への影響を検討した研究は行われているものの, レズビアンおよびゲイ双方を取り扱った研究は十分にはなされていない。本研究では, 調査対象を男性異性愛者と女性異性愛者の双方とし, レズビアンおよびゲイに対する偏見・差別意識の低減をめざした介入方法として仮想接触が及ぼす効果と有用性を検討すること, 仮想接触群と統制群でレズビアンおよびゲイに対する意識や態度に違いがあるかについて探索的に検討することの二つを目的とした。

【方法】 大学の対面講義内とオンライン講義で学部生に対して研究への参加を募り, 無記名の質問紙ウェブ調査を実施した。回答に欠損がなく, 自認する性が男性または女性であり, かつ性的指向が異性であると回答した92名(男性47名, 女性45名), うち実験群では46名(男性26名, 女性20名), 統制群では46名(男性21名, 女性25名)を分析対象とした。レズビアンおよびゲイに対する態度を測定する尺度として, 堀川(2018)が作成したATL-JとATG-Jの下位尺度からなるAttitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale日本語20項目版(ATLG-J20)を使用し, 9件法にて回答を求めた。フェイスシートにて, 実験群・統制群ともに, 年齢, 性別, 性的指向を尋ねた。実験群ではレズビアン女性との仮想接触場面を教示した後ATL-J10項目に回答を求め, ゲイ男性との仮想接触場面を教示した後ATG-L10項目に回答を求めた。統制群ではレズビアンについて想像させた後ATL-J10項目に回答を求め, ゲイについて想像させた後ATG-J10項目に回答を求めた。実験群・統制群ともに教示後に想像したことに関して自由記述を行わせた。

【結果・考察】 性別と実験条件を独立変数, ATL-JとATG-Jに従属変数とした二要因分散分析を行った結果, ATL-JとATG-Jの各下位尺度で有意な交互作用は見られなかった。KJ法におけるグループ分けの結果, 「分からない」グループが統制条件のみで見られた。仮想接触を用いることによるレズビアンおよびゲイに対する偏見・差別意識を低減する効果は認められず, 有用性は示されなかった一方で, 仮想接触を行うことでレズビアンおよびゲイに対して「分からない」という姿勢はなくなった。仮想接触は, 必ずしも偏見・差別意識の低減に影響を及ぼすとはいえないが, レズビアンやゲイを意識するひとつの機会となる可能性があると考えられる。